

## オリンピックと女性①

## オリンピック評論家 伊藤 公

一世紀ちがい歴史を持つオリンピックは、このところ女性の活躍が目を見えます。女人禁制が始まったこの大会を、いま一度振り返ってみましょう。

## 創立八十七年目に女性委員初選出

現在、国際オリンピック委員会（IOC）委員の総数は九十六人である。大陸別に分類すると、ヨーロッパ大陸が圧倒的に多く四十一人、二番目が南北アメリカの二十人で、以下アフリカの十七人、アジアの十四人、オセアニアの四人となっている。そのうち、ヨーロッパの四人、南北アメリカの三人の計七人は女性である。

一九八〇年のモスクワ五輪終了後にIOCの第七代会長に就任したサマランチは、自分が初めて議長を務める八年のバーデンバーデンにおける第十四次IOC総会の席上、七人の新委員を提案、その中に二人の女性が含まれていた。IOCは創立八十七年目にして、初めて女性を委員に選出したのだ。

榮譽を担ったのは、フィンランドの陸上選手としてミュンヘン、モントリオール、モスクワ大会に参加の実績をもつビルヨ・ヘッグマン夫人と、ベネズエラのテニスの元国内チャンピオンフロール・イサバ・フォンセカ夫人。実はIOCに女性委員を入れようし

たのは、サマランチが初めてではない。サマランチの前任者のキラニンも、七

二年にブランデージからバトンを引き継いだ段階でそのことを考え、頭の中では、ブルガリアのナデア・レカルスカ女史と米国のテネシー・オールブライト博士を描いていた。しかし、両女史の住む国には、既に委員がおり、空席がなかったために、キラニンの「片思い」に終わっていた。

その点、サマランチは、女性委員を誕生させるタイミングに恵まれていたのかもしれない。ヘッグマン、イサバ・フォンセカ夫人に次いで翌八二年には、英国のフェンシングの元国内チャンピオンメアリー・アリソン・グレンヘイグ夫人が選ばれ、IOCはそのあと八四年にはリヒテンシュタインのノラ王女、八六年には米国のボート・エイトの元選手で、七六年のモントリオール大会の銅メダリストのアニタ・デフランツ女史、八八年に英国の元馬術選手のアン王女、九〇年にカナダのキャロル・アン・レザレン夫人を選んでいる。しかし、女性の五輪における道のりは平坦ではなかった。

## 第二回に初出場 四方国十二人

ギリシャのオリンピアで紀元前七七六年から紀元三九三年の千年以上におたり、ゼウスの神に捧げる祭典競技として行われた古代オリンピックでは、いかなる競技種目にも、女子が参加することは許されなかった。つまり古代オリンピックは、「女人禁制」の大会だった。

近代オリンピックは、フランスのピエール・ド・クーベルタン男爵が中心になり、古代オリンピックにヒントを得て復活したが、それだけに古代オリンピックを模倣したことが意外に多い。例をあげると、四年ごとに開催することや、一八九六年のアテネでの第一回大会を、女人禁制の大会にしたことなどである。

国際オリンピック委員会（IOC）の資料によると、第一回アテネ大会の開催期間は四月六日から十五日までの十日間で、十三カ国から二百九十五人の選手が参加したことになる。

この二百九十五人は、全員が男子で、陸上競技、水泳などをはじめとする八競技四十二種目にしのぎを削り合った。

古代オリンピックならいざ知らず、近代オリンピックの第一回大会で、女子選手の参加が許されなかったのはなぜか。理由は極めて簡単で、復興者のクーベルタンが、「女性を観衆の面前にさらすことを好まず、優勝者の榮譽をたたえる表彰式の時に、その手伝いをするのが女性の役目と考えていたからだ」と言われている。

女子選手が初めて登場するのは、一九〇〇年パリで開催された第二回大会である。この大会では、十六競技九十四種目が実施され、二十一カ国から千七十七人の選手が参加している。その千七十七人の中に、わずかに十二人の女子選手が含まれていた。彼女たちは英国、米国、フランス、スイスの四方国から選ばれた代表で、ゴルフとテニスの二競技に参加している。女子選手初の実績は、テニスに出場したウィンブルドンチャンピオン、英国のシャーロット・クーパー選手だった。初期の五輪では、男性至上主義がまかり通り、女性の存在は軽視されていた。

（信濃毎日新聞より転載）

△つづく▽